2020（令和２）年度

京都府NIE実践報告書

Newspaper in Education

（教育に新聞を）

京都府NIE推進協議会

目　次

□ 発刊にあたって
京都府ＮＩＥ推進協議会　会長　　位藤　紀美子　……1

１．　社会や友達との「つながり」を高める新聞活用
京都市立新町小学校　西村　崇　……2

２．　コミュニケーション力を高める新聞活用
京都市立竹の里小学校　今野　裕介　……7

３．　新聞に親しみ教科等の指導に生かす
宇治市立大久保小学校　上野　純江　……11

４．文章の内容を的確に読み解き、根拠と理由を明確にして自分の考えを形成することができる児童の育成
～語彙を豊かにする指導の工夫改善を通して～
伊根町立本庄小学校　桑形　陽介……16

５．　新聞を読む習慣・情報収集力を育てる実践
京都市立下鴨中学校　疋田　恵麻　……23

６．　論証の強さを評価する－ＮＩＥの実践を通して－
京都市立大淀中学校　矢倉　裕也　……27

７．　「学びの深長」のツールとしての新聞～多様性と寛容を求めて～
龍谷大学付属平安高等学校　佐々木　じろう　……33

８．　新聞を活用して文章力・多面的考察力・生きる力・地域探究力を高める授業実践
京都府立須知高等学校　辻垣　晃一　……38

９．　継続して培う「オピニオン」のちから
綾部市立上林中学校　船越　寿子　……43

□これまでの実践校、準実践校、奨励枠、トライアル校　……49

※報告書の所属・肩書きは、2020 年度在籍校のものです。

発刊にあたって

ご　あ　い　さ　つ

京都府ＮＩＥ推進協議会
2020 年度会長　位藤　紀美子

2020 年度の実践報告書をお届けいたします。京都府におけるＮＩＥ推進にあたっては、教育実践に直接携わる小学校・中学校・高等学校の先生がたをはじめ、教育委員会や学校、新聞社、日本ＮＩＥ学会等の諸機関のいろいろなかたがたにご協力やご支援を賜っております。篤くお礼を申し上げます。

2020 年度は、１月早々に始まった新型コロナ禍で終始しました。新型コロナ感染者数等の増減により、「緊急事態宣言」や「まん延防止等重点措置」等の政策がとられ、ようやくワクチン接種が始まり広がりかけると、変異株種のコロナウイルスが次々と見つかるという状況が、世界中で、現在も続いています。一人ひとりの命を守るための、感染予防を第一としながら、それぞれのおかれた場で、職務等を遂行し、制限のある生活が続けられています。

こうした中で、教育現場では、前年度の卒業式の中止に続き、4 月の入学式をはじめ、様々な学校行事が取りやめになったり、学校での通常の授業や活動ができず、オンライン授業や、時間と人数を限定した授業等が、断続的に実施されたりしています。このような厳しい状況において、ＮＩＥ指定校の先生がたは、限られた授業や活動の中に、新聞活用の機会や場を設け、児童・生徒自身がその「意義・役割」を実感することができた等々の「報告書」を寄せてくださいました。ありがたく、心より感謝申し上げます。

その中に、ＮＩＥに取り組んで 5 年目の中学校から、5 年間の実績をまとめたものが出されました。新聞を一つの教材として、生徒が自分の意見を形成し、それを相手に分かりやすく伝える工夫をしたり、また、自分たちで新聞を作成したりする力が育っており、さらに下級生にも受け継がれていこうとしていること。また、新聞活用について、教師間の連携ができ浸透しつつあること等、「継続」ならではの成果がうかがえ、嬉しく存じます。

児童・生徒は、いかなる状況にあろうと、日々育っています。新聞が一つの「社会への窓」として、各自の視野を拡充し、その人ならでの想を耕し、考えや意見を形成し、それを、場や相手に応じて、適切に表現・交流することができるようになるために活用されるよう、一人ひとりの毎日の生活や学習に定着することができればと願っております。そのために、発達段階に応じたいろいろな活用法や学習者の実態等をお知らせください。

現在、社会や学校におけるデジタル化が急速に進められるなかで、課題も出て来ております。紙媒体の新聞や図書等の入手や使用が困難になってきつつあることです。情報教育の重要さが増すなかで、受容から発信までにかかわり、「紙」（新聞等だけでなく、メモ・ノート、原稿用紙、書簡等をも含む）ならではのことをどうするか、ぜひご議論いただきたく存じます。

どうぞこれからもいっそうのご指導やご支援、ご協力を賜りますようお願い申しあげます。

小学校　第３・４学年　国語科

社会や友達との「つながり」を高める新聞活用

京都市立新町小学校　教諭　西　村　崇

１．実践の概要

本校は、「自ら進んで考え、ともに高め合い、夢に向かって歩む子の育成」という学校教育目標を掲げ、研究主題「社会的自立を目指す子どもの育成～主体的に取り組む子どもを目指して～」と設定し、取り組みを進めてきた。

本年度は、研究で目指す子ども像である、「人や社会とかかわり、学び合おうとする子・自分を知り、ねばり強く取り組む子・進んで課題を解決する子・夢や目標を思い描く子」を達成するために、生き方探究（キャリア）教育に取り組んできた。

昨年度より、新聞を授業の中に取り入れたり、新聞コーナーを設置するなどして新聞をより身近なものにしていったりする取組を進めてきた。新聞を読んで多様な意見や考えに触れることは、「人や社会とかかわり、学び合おうとする子」の伸長に特に有効であると考えた。さらに、はがき新聞や壁新聞など新聞作成を学習の中に位置付けることにより、目指す子ども像により迫ることができるのではと考え、取組を進めてきた。

昨年度、高学年のエリアを中心に新聞コーナーを設置していたが、今年度はより多くの児童に新聞に親しんでもらいたいと思い、玄関に設置することにした。管理用務員・新聞委員会担当教員・新聞委員会児童が役割を分担し、各学年で使用したいときはそこから自由に活用したり、好きなときに新聞を手に取ったりできるように置き場所を設置した。新聞委員会を新設したことで、毎朝の新聞の管理も児童自身が行うようになり、より子どもたち主体の活動へと変えていくことができた。

２．実践事例

①第３学年　国語科「ありの行列」

３年生「ありの行列」の学習では、「学習で学んだことを２００字程度の文章でまとめよう」というめあてで、はがき新聞を活用した。

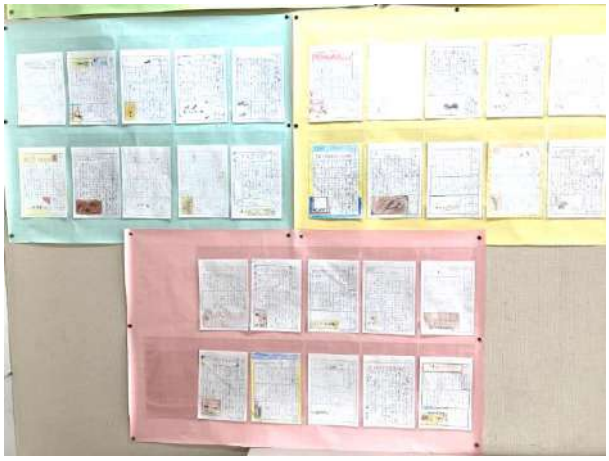
３年生では、少しずつ字数も意識して書く練習をしていくことが大切になってくる。２００字というと、４００字詰め原稿用紙半分の量であるが、原稿用紙を半分に切ったものを渡すだけでは上手に書くことができない児童や意欲のわかない児童も見られていた。

そこで、Ａ５サイズ・８ｍｍ方眼のはがき新聞の用紙を使って書くことにした。８ｍｍ方眼のはがき新聞の用紙は、題名や見出しなどを除いた本文をすべて使うと、２２２字書くことができる、まさに２００字程度の文章を書く練習には最適なツールである。「こんなに書けるかな。」と不安になっていた児童には、「２段目まで書くことを目標にして、３段目は初め全部絵になっても大丈夫だよ。」と声掛けをすると、安心して書き始めることができた。文字の大きさは少し小さくて大丈夫かなと思い、拡大した用紙も支援として準備をしていたが、小さい文字を書くことが苦手な児童もていねいに書き進めることができていた。小さい文字を書くことが，集中して書くことにつながり、３年生にとっては少し難しいことにチャレンジするという意欲付けにもつながっていた。

（はがき新聞作品例）

また、小さくコンパクトにまとめられるという良さを生かして交流の方法にも工夫を行った。この「ありの行列」の教材文で面白いと思ったことや興味がわいたことは、「ありの行列ができる仕組みについて」「ありの体の面白さについて」「ウイルソンの努力や頑張りについて」など、児童によってばらばらであった。そこで、自分と同じ視点で書いている友達、違う視点で書いている友達を見つけて、一つの教材文を読む際の多様な視点を見つけられるようにした。コンパクトにまとめられているので一人分を読む時間も短く、多くの友達の作品を交流することができる点がよかった。

右の写真は、出来上がった作品を見ながら自分の作品の参考に生かそうとしている場面。「この見出し面白いな。」「ウイルソンのことを書いている人は少ないな。」などと自然とつぶやきが出ていた。



完成した作品は教室に掲示し、国語の時間以外にも自由に見られるようにした。空き時間等も上手に活用していくことで子どもたちの自主的な学びの場が広がっていくと考えている。

②第４学年　国語科「新聞を作ろう」

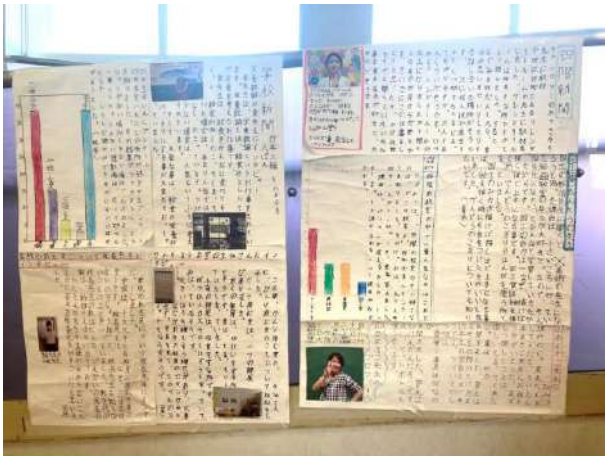
４年生では壁新聞作りに取り組んだ。まずは新聞にはどのようなことが書いてあるのか、どんなつくりになっているのかなど新聞の機能について学んだ。その学習の際にも学校にある多くの種類の新聞が非常に有効であった。

教室にも KODOMO 新聞コーナーを作っていくことで、「見出し」「記事」「写真」「図」などが効果的に使われていることを実感を伴って学ぶことができた。

もう一つ大切にしたことは取材活動である。新聞は自分の伝えたいことを書くためにインタビュー活動も必要となってくる。コロナで社会見学などの校外学習がなくなっていく中で、学校内の教職員に仕事についてインタビューをするなど工夫し、記事を書き進めていった。

また、壁新聞は記事ごとに役割分担をしたり、レイアウトや記事の大きさを決める際に話し合い活動を取り入れたりしていくことで、人間関係形成・社会形成能力を高めていくことにもつながった。

（完成した壁新聞や廊下掲示を見ている様子）



③新聞委員会の取組

今年度から新聞委員会を新設し、活動に取り組んだ。新聞委員会では、「コロナで明るい話題が少ない今だからこそ、みんなに元気を与えられるような記事を紹介したい！」という目標を立て、毎日担当の児童が新聞をスクラップし、一言コメントとともに、掲示をした。朝の登校時間や、休み時間等に子どもたちが「今日の記事は何かな。」と掲示板を読んでいる姿を見ることができた。また、委員会の児童が B４サイズの手作りの新聞を毎月作成し、校舎内に掲示をしていくことで、どの学年の児童も新聞を身近に感じられるような工夫をしてきた。

児童は、毎月の委員会活動において、次の新聞の話題について話し合い、月ごとに合ったテーマは何かを考えていった。初めは自分たちの書きたいことばかり書いている新聞になっていることもあったが、回数を重ねていくうちに、「もうすぐクリスマスがあるから、１年生にインタビューをしに行こうよ。」「新しい先生のことを載せたらみんながよくわかるね。」など、相手意識をもって新聞作成ができるようになってきた。

３．成果と課題

〈成果〉

昨年度からの積み上げもあり、子どもが新聞をよく手に取る様子が見られるようになった。玄関という全校児童がよく通る場を活用したことで、より多くの学年に向けて広げていくことができた。

新聞作成でもはがき新聞やＢ４サイズの新聞、壁新聞などを用途によって書き分けていくことで、学年の実態に合わせて自分の考えを発信する手段として有効に活用していくことができた。また、書くだけでなく、交流・掲示を工夫していくことで、子どもたち同士の学び合いが活性化した。

〈課題〉

キャリア教育と新聞とが密接に関わることは分かったが、全学年に広げていくには学校全体としての取組や協力が必要になってくる。学年間で連携を取りながら、系統立てて続けられるようにしていきたい。

また、GIGA スクール構想により、一人一台児童用のタブレットが使用できるようになった。端末を生かしての新聞記事や感想の交流など、新たな新聞活用の仕方が見出せるのではないかと考えている。有効な活用方法をさらに模索していきたい。

小学校　国語科　社会科　総合的な学習の時間　特別活動等

コミュニケーション力を高める新聞活用

京都市立竹の里小学校　教諭　　今　野　裕　介

１．実践の概要

本校は、「自らを高め　共に生き　未来を創造する子ども～やればできる～」という学校目標を掲げ、研究主題「自ら《問い》を立て、粘り強く学び合う子どもの育成～効果的なグループコミュニケーションを通して～」を設定し、取組を進めてきた。

昨年度は実践指定校２年目であり、言語活動を充実させる取組の一つとしてNIE 活動を取り入れた。本年度も、国語科や総合的な学習の時間、社会科、特別活動での言語活動の充実に向け、ＮＩＥ活動（新聞活用）を取り入れた。新聞には、様々なジャンルの記事が載っており、子どもたちが興味・関心のある記事もそれぞれである。自分が読んだ記事からどんなことを感じ、何を考えたのかを書き表し、子どもたち同士で伝え合うことで子どもたちの語彙数・言語力・表現力が高まると考えた。

そこで、ＮＩＥ実践３年目も引き続き、研究教科の国語科を中心に総合的な学習の時間や特別活動とも関連付けて、はがき新聞作り、壁新聞作り、新聞を読んで考えを伝え合うコミュニケーションタイムなどに取り組んだ。

２．新聞の置き場所と整理方法

昨年度に引き続き、どの学年の子どもたちも、いつでも自由に閲覧し、新聞に親しむことができるよう、図書室前の廊下前に新聞コーナーを設置した。

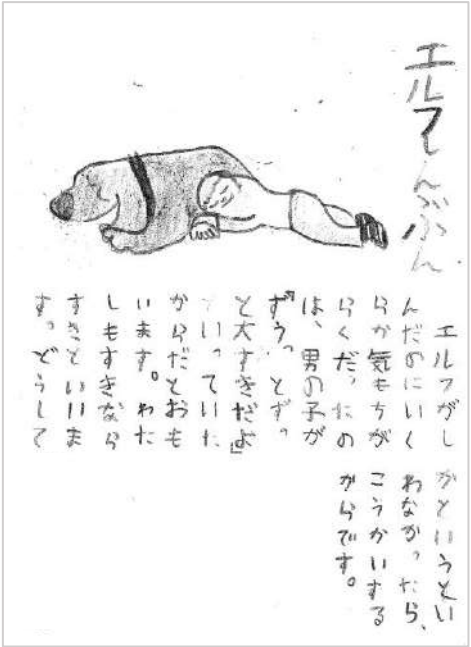
また、昨年度は高学年の廊下にのみ新聞コーナーを設置したが、本年度は中学年の廊下にも新聞コーナーを設置した。新聞を廊下に置いたことで、すぐ新聞を手に取れる機会が増え、より身近なものとして新聞に興味をもつ子が増えた。毎日の新聞記事にどんなことがのっているか確かめる子や朝のリーディングタイム（朝読書の時間）に新聞を読む子など、積極的に新聞を読む子どもたちの姿が見られるようになった。

３．実践の内容

（１）新聞作り

実践３年目として、年度当初にたてた NIE 年間計画をもとに、壁新聞やはがき新聞作りに取り組んだ。研究教科の国語科だけでなく、総合的な学習の時間、社会科の学習で学んだことを中心に、様々な学習のまとめとして新聞作りに取り組んだ。

１年生では、国語科「ずうっと、ずうっと、大好きだよ」の学習でまなんだことをはがき新聞にまとめた。登場人物のエルフの気持ちに自分の思いを寄せて、「自分だったらどんな気もちになるかな。」と考えたことや感じたことを中心に書き表した。また、一番印象的だった場面のイラストを描き、伝えたい文章と絵を繋げてまとめることで、読み手に伝えたいことを絞って簡潔に書くことができたことにより、児童が意欲的に学習を進めることができた。



３年生では、社会科「商店のはたらき」の学習で学んだことを、壁新聞にまとめた。お店にある工夫や働いている方の思いなど、自分が一番伝えたいことを記事にして書き表した。初めての新聞作りに取り組む中で、読む人に分かりやすいような写真や絵を選んだり、興味関心をひくような見出しを工夫してつけたりすることで、読み手のことを考えた分かりやすい新聞を作ることができた。

4年生では、総合的な学習の時間「竹の里自然守り隊」で、フジバカマを育てて気付いたことや感じたこと、地域の方が大切にされている思いなどを壁新聞にまとめた。読み手を意識した内容で表現を工夫し、学習したことや考えたことをそれぞれが振り返りながらまとめることができた。書き終わった後は、グループで交流し、伝えたり、読み合ったりする楽しさを感じることができた。

（２）課外の時間

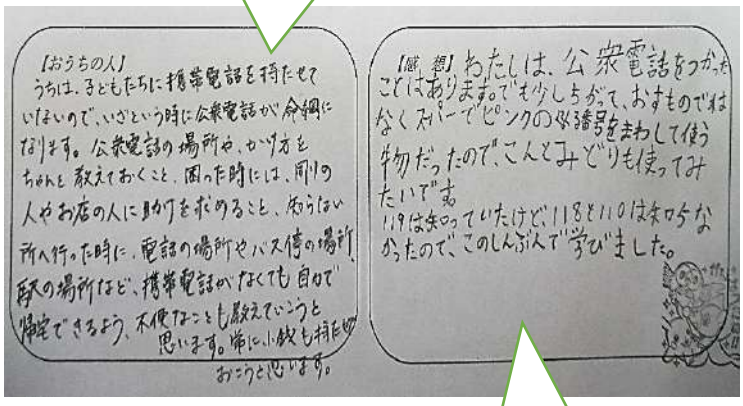
毎週金曜日の朝の時間（コミュニケーションタイム）に、新聞を活用したコミュニケーションの時間を取り入れるようにした。クラスで同じ記事を読み、グループで感じたことや考えたことを交流したり、クラス全体で意見を繋げ合ったりした。同じ記事についてみんなで話し合ことで、子どもたちは様々な視点から記事を読んだり、考えをもったりできるようになった。

（４）読書週間

年２回、春と秋の読書週間の時に、お家の方と一緒に一つの新聞記事を読んだ。そして、子どもとお家の方がそれぞれ感想を書き、交流した。「今まで一緒に読んだことがなかったので、一つの記事を通して親子で考えることができて良かった」というお家の方からの感想や「記事を読んだ僕の考えとお母さんの考えは、同じ意見だけど、その理由が違っていたので、いろいろな見方ができると知った」という子どもの感想があって、記事の内容を様々な視点でとらえることができた。

学年や子どもの実態に応じた新聞記事を選ぶ。

お家の方の感想



子どもの感想

４．成果と課題

<成果>

NIE 実践 3 年目ということで、年度当初にたてた NIE 年間計画をもとに、様々な教科や活動で効果的に新聞を活用することができた。その中で、昨年の課題として挙げられていた高学年中心の取り組みを、今年度からは全学年でも取り組むことができた。そして、NIE 活動を通して子どもたちは自分の考えや思いをもち、それを伝え合うことでコミュニケーション力を高めることができた。

<課題>

NIE 年間計画に沿って全学年が取り組む中で、良かったことや分からないことなど学校全体で交流し、話し合うことができていなかった。経過的に取組の交流や検討を行うことで、よりよい NIE 活動に繋がると考える。また、壁新聞やはがき新聞など子どもが作った成果物を掲示したり、学校全体で交流できなかったりしたので、来年度は全校での子ども同士の伝え合うこと・学び合うことを大切にしていきたい。

小学校　全学年　朝学習・国語・総合的な学習の時間

新聞に親しみ教科等の指導に生かす

宇治市立大久保小学校　学校図書館司書　上　野　純　江

１．　実践の概要

ＮＩＥ実践２年目にあたる今年度は、コロナ禍での学校の休業もあり、８５０名の児童が学校再開後に安心・安全に学校生活を送れるように、教員たちで知恵を出し合って感染防止対策を行った。図書室でも、カウンターの仕切りやフロアーマーカーの設置を行い、入り口と出口を決めて対面や密を避けて一方通行にした。休業中の準備は大切で、学校が始まってから児童への安全指導に役立った。休業後は学習の遅れを取り戻すように時間割が組まれる中、教科学習の中での新聞の学習が始まった。

今年度もＮＩＥ新聞読書タイムを全児童で行った。秋の読書週間より始めて、２週間に１回、新聞または新聞記事を読み、感想を交流し合う取組をした。読書週間が終わった後も、３学期まで取組を続けた。

教科の学習では、５年生が国語科の学習で、子ども新聞を読んで記事を切り抜いた。５年生は年間を通して「書く」活動の中で「説明文の構成から要旨をとらえる力を養い、字数を決めてまとめられるようにする」ことを重点学習として取り組んでいて、新聞の論説文を読んで、新聞記事から文章を引用し、自分の考えを加えて、要旨をまとめることに取り組んだ。

４年生は国語科「新聞を作ろう」の学習で、子ども新聞を参考にして学習を始めた。朝日小学生新聞（2020 年 9 月 2 日）を児童数分送っていただいたので、新聞記事の切り抜きができた。

３年生の国語科でも児童数分の朝日小学生新聞を使って、新聞の切り抜きをした。

特別支援学級（ひろの学級）では、９月の連休の間に自主勉強で「新聞記事を切り抜き、自分の考えを書こう」という取組を行った。ノートの左半分に切り抜いた記事を貼り、右半分に自分の考えを書いた。

２年生のＮＩＥ新聞学習タイムで京都新聞の「ねんてんせんせいの５・７・５」の記事を選んだ。先生が中にのっている俳句を紹介したところ、「保育園やのに、ぼくよりじょうずやなあ。」と言う児童がいて、俳句のことばの使い方のうまさに気付いた。

ことばの力の育成に新聞を利用すると、児童が興味を持って取り組めることが分かった。

２．　新聞の置き場所と保管方法

コロナ感染防止対策のため、教室内のロッカーやオルガンなど、廊下に出せるものは出して、児童机の間隔を広げたため、廊下のスペースの確保が難しく、子ども新聞コーナーは２か所になった。

廊下に子ども新聞コーナーを２か所、図書室内に一般紙のコーナーを１か所と新聞閲覧台を設置した。そこで新聞を自由に閲覧できるようにし、数紙の新聞を見比べられるようにした。

図書室内の新聞の置き場所

当日の一般紙

一般紙

新聞閲覧台

廊下の子ども新聞コーナー

３階　図書室前廊下

２階　３年教室前廊下

過去の新聞は図書室で保管し、児童が自由に手に取れるように置いた。

キャスター付きの３段ラックに置いているので、各教室への移動がスムーズにでき、学習に必要なときにタイムリーに活用することができた。

昨年度よりＮＩＥの取組をしていて、過去の新聞のストックがあることにより、児童数８５０名と多人数でも、興味のある新聞を選び、切り抜きなどができた。

３．　実践の内容

学習に関連する新聞記事を、各教科の授業にどのように有効活用できるか、学年の先生方と相談をしながら、実践をすすめた。

（１）　６年生　総合的な学習の時間「宇治学」関連での活用

京都新聞より、「宇治」に関する記事を切り抜き、ファイリングした。ファイルは教室に貸し出した。

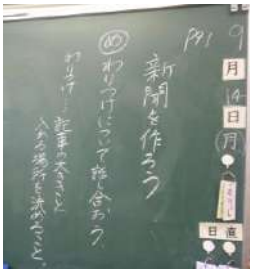
（２）　５年生　国語科　新聞記事を切り抜く

バックナンバーの小学生新聞（京都・朝日・毎日・読売）も利用し、記事を切り抜き、要約をして、その記事に対する自分の考えを書いた。

朝日新聞の児童数配布に応募し、９月４日（金）付けの新聞をいただいた。５年生児童は自分が興味を持った新聞記事を切り抜き、要旨をまとめた。

（３）　４年生　国語科「新聞を作ろう」

朝日小学生新聞児童数で送っていただいた新聞を使って、見出しやリード文などの新聞の構成について学んだ。自分で新聞を作るときの割り付けについて本物の新聞を見て学び、レイアウトを考えた。



（４）　３年生　国語科

朝日新聞（児童数で送っていただいた新聞）を読み自分が興味を持った記事を切り抜いた。

切り抜いた記事はノートに貼って、読み返した。

（５）　特別支援学級　新聞の学習

新聞を読み、興味を持った記事を切り抜き、ノートにまとめた。

（６）　はがき新聞の取組（図書委員会）

図書委員会の取組でおすすめの本をはがき新聞に書いた。はがき新聞形式は誰にでも記入しやすいので、字や絵の上手な児童だけでなく、書くことが苦手な児童も取組むことができた。図書委員全員ではがき新聞を書くことができた。

（７）　ＮＩＥタイム

今年度も秋の読書週間に合わせて、２週間に１回、全児童で新聞を読む取組をした。

４年生は新聞を使って、「新聞記事の中から英語を見つけよう。」という問いかけで、児童が探し出した言葉を発表した。「ＮＰＯ」などの３文字が多かったが、児童は楽しんで言葉見つけをしていた。

２年生は新聞記事の俳句の鑑賞をした。教員が俳句の紹介をして読むと、言葉使いのうまさに感心した児童から、意見が出て、楽しい時間になった。

（８）廊下の掲示

新聞の英語の記事から、顔の部分の単語を紹介した。

児童の目に触れる場所に掲示をすると、英語が身近に感じられる。新聞記事には英語が多く載っているので、興味を持ちそうなものを選んで掲示した。

図書委員が興味を持った新聞記事を選び、図書室横の掲示板に掲示した。

図書委員が毎日、職員室に当日の新聞を取りに行き、前日の新聞と入れ替えをして、児童が毎日新しい新聞を読めるようにした。

４．　成果と課題

＜成果＞

コロナ禍での学校休業から、６月に授業が再開する中、教科の学習をすべて履修させるために児童と教職員が全力で学びを進めながら、今年度が始まった。正直、ＮＩＥができるのか不安であったが、秋の読書週間の取組のひとつとしてＮＩＥ新聞読書タイムをすることができた。

全校児童８５０名全員がＮＩＥ新聞読書タイムの中で、新聞または新聞記事を読み、感想を交流して新聞に親しみ、様々な文章に触れる機会を持つことができた。

児童数が多いことにより、なかなか個々の新聞を用意することが難しかったが、今年度はバックナンバーの新聞や児童数分の新聞をいただいて、新聞そのものを手にすることができた。その新聞から、児童が自分で興味のある記事を見つけたり、切り抜いたりする取組などもできた。

新聞を読むことにより、語彙が増えて、人に伝わりやすい言葉使いを知ることができた。ことばの力の育成につながった。

＜課題＞

低学年の児童には、新聞の中からＮＩＥ担当者が記事を選んで児童数分を印刷し、各クラスに配った。児童が興味を持つような記事を選ぶ時に、教員もともにできるとよかった。

教科学習の中に新聞をどう組み込んでいくか、工夫していくことが必要だ。

小学校　国語科　社会科　総合的な学習の時間等

文章の内容を的確に読み解き、根拠と理由を明確にして自分の考えを形成することができる児童の育成
～語彙を豊かにする指導の工夫改善を通して～

伊根町立本庄小学校　教諭　桑形　陽介

１．本校の実態

本校では、国語科を重点研究教科に位置付け、「文章の内容を的確に読み解き、根拠と理由を明確にして自分の考えを形成することができる児童の育成～語彙を豊かにする指導の工夫改善を通して～」を研究主題として掲げている。

本校の児童は、豊かな自然環境の中で伸び伸びと育ち、明るく素直である。また、学校行事や様々な活動においても意欲的に取り組み、協力し合うことができる。しかし、気心が知れているが故に教師や友達への依存心が強く、自ら進んで学習に向かう態度にはまだまだ課題が見られる。さらに、少人数の学習集団であるために多様な考えが出にくい実態がある。

国語科については、辞書の活用や新聞記事を題材にしたスピーチ発表などを通して、「適切に言葉を選ぶ力」「発表し、伝える力」の向上を目指してきた。国語科において、「読むこと」「書くこと」の力を鍛えることによって、文章の内容を的確に読み解き、根拠や理由を明確にして自分の考えを形成することができれば、思考力・表現力がさらに高まり、学力向上につながるのではないかと考えている。学校全体で国語科と連動しながら日常的に新聞を読む活動に取り組むことで、様々な記事に触れ、児童の社会への関心を高め、語彙を豊かにする多様な活動を取り入れた指導の工夫改善に取り組み、児童が課題意識をもって必要な事柄や情報を読み取ったり、それらを整理し発表したり文章表現したりすることに達成感を味わえるような指導方法の研究を進めてきた。

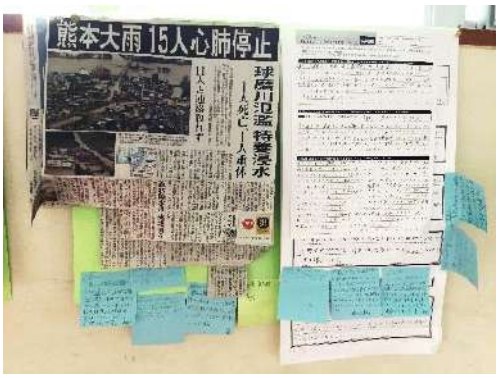
２．学校としての取り組み

（１）NIE コーナーの設置

職員室前の廊下に NIE コーナー（一般紙、子ども新聞）を設置した。ここで自由に新聞が閲覧できるようにし、見比べたり、座ってじっくり読んだりできるようにした。また、国語辞典や漢字辞典を近くに置き、分からない言葉や漢字をすぐに調べられるようにした。

（２）「いっしょに読もう！新聞コンクール」への応募(1 学期)

「いっしょに読もう！新聞コンクール」に取り組むにあたり、事前に 3 年生以上の学級で「スピーチ発表」を 2 回実施した。これは、自分が「読みたい」「気になる」といった記事を選び、「記事を選んだ理由」「記事の要約」「記事を読んで自分が考えたこと」について文章にまとめてスピーチ原稿を作成し、それをもとに各学級でスピーチ発表を行うという取り組みである。各学級でスピーチをした際には、聞き手は付箋に感想を書き、発表者に渡して交流した。その後は、「スピーチ原稿、選んだ記事、聞き手の感想」を色画用紙に貼ってまとめ、校長室前の廊下に掲示して全校児童や保護者・地域の人たちの目に触れるようにした。この「スピーチ発表」で選んだ記事を、「お家の人にも紹介して一緒に読もう。」と取組を広げる形で、「「いっしょに読もう！新聞コンクール」の応募につなげることができた。



【選んだ新聞記事とスピーチ原稿は廊下に掲示し、継続的に取り組んだ】

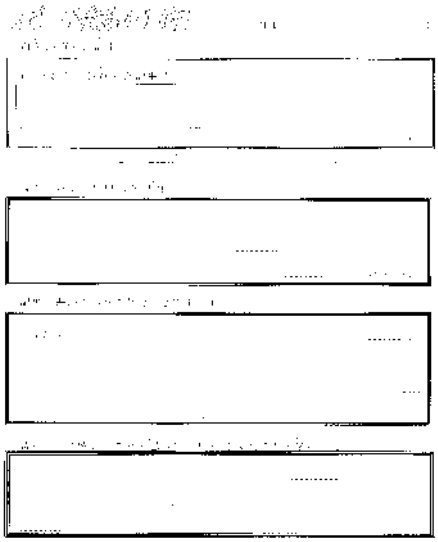
（３）全校スピーチ(2 学期・3 学期)

新聞に慣れ親しみ、記事を読むことを通して自分の考えを持たせることと、話す力・聞く力の向上をねらいとして、上記の「学級でのスピーチ活動」を発展させ、全校児童の前でスピーチをする「全校スピーチ」に取り組んだ。

まず、スピーチの準備として、自分が興味・関心のある新聞記事を選び、スピーチ発表原稿の枠に沿って「選んだ理由」や「自分の考え」「みんなに伝えたいこと」などをまとめる。次に、原稿をもとに各学級でスピーチ発表をし、聞き手が付箋に感想を書き、発表者にわたした。

この発表原稿をもとに、3 年生以上の児童が数人ずつ、全校児童の前でスピーチをした。「話すこと・聞くこと」のねらいを示すことで、回数を重ねるごとに相手を意識した話し方と聞き方が身についてきた。新聞記事を題材にしてスピーチ活動を行うことで、情報を選択し、活用する力を育成することに繋がり、選んだ新聞記事の紹介や理由等、自分の思いを聞き手に分かりやすく伝えるための工夫をして話したり、話し手の考えを捉えながら聞いたりすることで、「話すこと・聞くこと」の力も付けることができた。

【話す・聞くめあて・スピーチ原稿の枠】



（３）みんなで新聞を読む日

週に１回「みんなで新聞を読む日」を設定して、朝の読書の時間 10 分間を活用し、3 年生以上が取り組んでいる。この日は登校すると NIE コーナーから自分が読みたい新聞を選び、教室に持って行き、自分の席でじっくりと新聞に目を通している。学年によって「みんなで新聞を読む日」の曜日を変えることで、少しでも多くの新聞から選べるようにした。

３．学年の実践事例

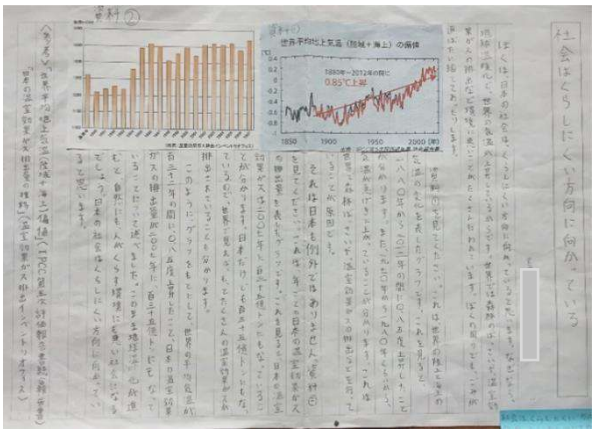
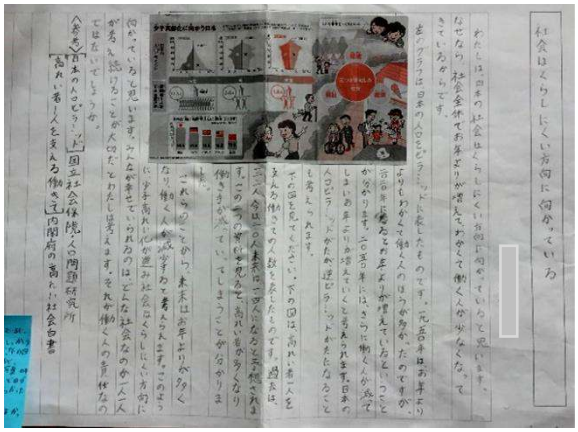
（１）国語科「書くこと」(4,5 年複式学級での実践)

「伝統工芸のよさを伝えよう～理由や例を挙げて考えを伝える（4 年)」

「グラフや表を用いて書こう～統計資料の読み方～（5 年)」

4 年の単元は、「世界にほこる和紙」を読んで、筆者の説明の仕方を捉えたり、要約したりし、新聞記事や百科事典などを活用して、伝統工芸について調べたことを書く活動を行うという、複合単元である。本単元では、調べて分かったことなどをまとめて書く言語活動が設定されている。このことによって、説明の仕方を捉えながら読んだり、文章を要約したり、取り上げる題材に関連する新聞記事や書籍を読んだりする必然性が生まれた。

5 年の単元は「読むこと」の説明的な文章単元「固有種が教えてくれること」と、「書くこと」の単元「グラフや表を用いて書こう」で構成される複合単元である。図版と文章の対応を読み取ったり、それらの資料の効果を考えたりすることを通して、自分の表現にも活かすことが指導のねらいである。そこで、図表やグラフの扱い方について、新聞記事を教材に用い、地図、表、写真、グラフといった多様な資料を提示しながら書き手が文章（記事）を書いていることを学習した。

【児童が書いた意見文　グラフや表は新聞記事から引用した】

【リーフレット　伝統工芸に関わる新聞記事を探し、参考資料にした】

今回は、どちらの学年も新聞にまとめるのではなく、「リーフレット（4年）」「意見文（5年）」であるが、「記事や主張内容を要約する力」や「読み手（相手）に伝えたい内容を明確に分かりやすく表現する力」を付けたいと考え、京都新聞社に協力をお願いし、新聞記者の方に読んでもらうことを学習のゴールとして設定した。児童は、「新聞記者の方に読んでもらう」という目的をもって、主体的に学習を深めていくことができた。

【新聞記者による出前授業の様子】

■具体的に書く
■エピソードや体験を書く
■インタビューしてみる
■表現の仕方を工夫する（「おもしろかった」「うれしかった」をちがう書き方で表現する）
■同じ言い回しは使わない。
■語尾を統一する。

【分かりやすく書くためのアドバイス】

（２）他教科での実践「新聞スクラップ」

５年生は社会科「これからの食料生産とわたしたち」の学習をした際に、「フードロス(食品ロス)削減」に興味を持ち、新聞から「フードロス（食品ロス)」に関連する記事を集め、分類したり、貼ったり、自分の考えや感想を書いたりして模造紙１枚にまとめ、４年生に発表した。５年生が作成した新聞スクラップを見た４年生から「新聞スクラップに挑戦したい」という声が挙がり、４年生は「東京オリンピック」をテーマに記事を集め、５年生の作品を参考にしながら作成した。まとめる際には、国語科で学習したことを活かし、記事の要約をしたり、小見出しを付けたりした。教科書の内容から興味を広げ、学習したことを活用し、学びを深めていく姿が見られた。

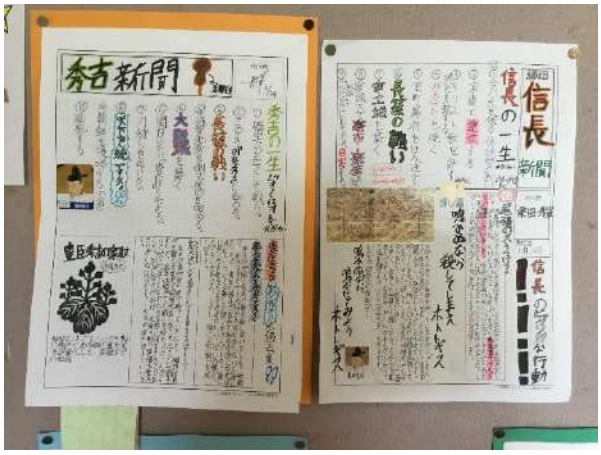
【みんなで新聞記事に目を通し、集め、分類し、模造紙に貼っていった。】

【出来上がった新聞スクラップ】

（３）学習のまとめ新聞

３年生以上では、様々な教科で単元のまとめに新聞づくりをした。廊下に掲示したり、児童同士が読み合い、感想を付箋に貼って交流したりするなどして評価し合い、継続して続けた。「どんな写真やイラストが効果的か」「興味を引き付ける小見出しとはどういうものか」などを考え、次第に読み手に分かりやすい新聞になっていった。また、学級の係活動で新聞係が誕生し、自発的

に月 1 回の学級新聞「わくわく新聞」が発行されるようになった。その内容には「行事を終えてのインタビュー」や「編集後記」などがあり、新聞に親しんでいる児童の様子が表れていた。



【歴史新聞(6 年生)】

【社会まとめ新聞(4 年)】

【「みそ通信」(みそづくり体験より)】

【学級新聞「わくわく新聞(係活動)」】

4．児童の主な取組の様子と実践前後の変化

国語科では、辞書の活用を指導しており、授業や宿題などで辞書を引く姿が見られるが、新聞を読む際にも分からない言葉が出てくると、児童は進んで辞書を使って調べていた。「スピーチ発表」では、「記事を選んだ理由」「記事の要約」「記事を読んで自分が考えたこと」に沿ってスピーチ原稿を書くことができた。発表では、記事をモニターに映し出すなど、より分かりやすく伝えようとする工夫が見られた。選ぶ記事は自分が興味のあることであるため、どの児童も「伝えたい」という気持ちを持って、意欲的に取り組んでいた。また、聞き手が感想を付箋に書いて交流することで発表者はとても嬉しそうにしていた。友達の発表を聞くことを通して「自分が知らなかったこと、自分が選ばない記

事」にも触れることができた。児童は登校すると新聞コーナーで立ち止まり、その日の新聞に目を通したり、休み時間に新聞コーナーに足を運び、新聞を手に取って会話したりしている。これまで以上に新聞に目を通す姿が見られるようになったと感じている。

５．おわりに（実践の感想）

取組を進めていく中で大事にしたことは「語彙を豊かにすること」「社会への関心を高め、情報を読み解く力、自分の考えを持つ力、相手に伝える力」である。児童は、新聞記事を読んでいて、分からない言葉があると、すぐに辞書を手に取って言葉を調べていた。これまでは授業や宿題など限られた時に使っていた辞書が、自然と「日常的に使う物」になりつつあるように感じている。これは児童が語彙を豊かにすることに繋がっていると考えている。さらに、「スピーチ発表」の中で、自分の考えを聞き手に分かりやすく伝えるための工夫をして話したり、話し手の考えを捉えながら聞いたりする経験を重ね、話すこと・聞くことの力も付けることができた。また、保護者に本校の教育活動と合わせて NIE の取組を説明し、家庭でも一緒に読んでもらうように啓発し、家庭の協力を得ながら取り組みを進めることができたことも成果の一つとして挙げられる。課題としては、低学年の新聞への興味関心を高めることが難しかったことが挙げられる。（「ほとんど、または全く読まない」と答えた児童はすべて 1，2 年生）今後は低学年から新聞に親しむことができるよう工夫していきたい。

新聞に親しみ、新聞を読む中で自分の興味・関心のある記事を選び、考えたことを友達と伝え合うことで、思いや考えの共有を図ることができる。本校の児童は、NIE の取組を通して、世の中の出来事や新聞の特集記事についての会話が増えたり、今まで以上に新聞コーナーに足を運んだりしており、取組前と比べて社会への関心が高まった。今後も、語彙を豊かにする活動を続け、文章を的確に読み、根拠と理由を明確にして自分の考えを形成しようとする児童を育成していきたい。

中学校　委員会活動・国語科・社会科

新聞を読む習慣・情報収集力を育てる実践

京都市立下鴨中学校　教諭　疋田　恵麻

１．実践の概要

本校は、「主体的に創造し、自己実現できる生徒の育成」という学校教育目標のもと、目指す生徒像である「自分の考えを持ち、他者とのコミュニケーションの中で、自分の意見や考えを深めたり創造したりして伝えることができる生徒」「学習・生活の自律を通して、確かな学力を身につけ、科学的思考ができる生徒」を達成するために、各教科でのＮＩＥ教育の活用を促し、各種取り組みを進めてきた。

環境づくりとしては、昨年度から６社の新聞を図書館や職員室前に配置し、誰でも気軽に手に取って新聞に親しむことができる工夫を行っている。その結果、昼休みや図書館での授業の際に新聞を手にする生徒も増えてきている。

しかし、今年度は、コロナ禍の中、休み時間に図書館でゆっくり閲覧することできず、生徒たちが新聞を実際に手に取って読む機会を設けることが難しくなった。そこで、新聞に親しむ習慣の確立や情報収集力の育成を新たな方法で目指す取組を企画した。その際、できるだけ生徒主体で運営すること、全校生徒で取り組むことを目標とした。

２．実践の内容

（１）全校での取組

図書館教育と学校図書館司書、ならびに図書委員会の連携により、図書委員会主体で、校内にて「私のおすすめ新聞記事の紹介」と「新聞記事コンテスト」を以下の内容で実施した。

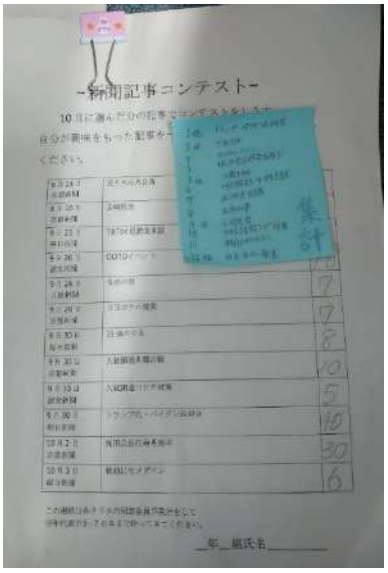
①図書館に配置している６社の新聞を、図書委員会の生徒たちが当番でお昼休みに読み比べ、各自が紹介したい「私のおすすめ新聞記事」を選ぶ。

②校内の３か所の掲示板に「今月の私のおすすめ新聞記事」コーナーを設置し、選んだ記事を掲示する。

③全校生徒は、毎日追加掲示されていく記事を好きな時間に読む。

④月末に図書委員が全校生徒に対して「今月のおすすめ新聞記事コンテスト」を実施して集約し、学校チャンプ記事を決定する。

⑤お昼の校内放送にて、図書委員長が「今月の学校チャンプ記事」を発表し、職員室前の「今月の皆が選んだ新聞記事コーナー」に掲示する。



（２）国語科における取組

①１年生：「絶滅生物についての新聞作り」

「幻の魚は生きていた」の単元で絶滅生物についての調べ学習を行い、調べた内容を新聞の形式でまとめ、発表・交流を行った。人間の生活と生き物や環境との関係について、自分の生活や体験と重ねて考えたことを、限られた紙面・文字数の中でいかにわかりやすく表現し伝えられるか、試行錯誤しながらも新聞の構成・特徴を捉えて意欲的に取り組むことができた。

②２年生：「社会情勢やＳＤＧｓを自分事とする取組」

まず、新聞を読む習慣を作り、生徒にとって新聞が身近な存在となる取組の一つとして、昨日・本日の新聞記事を紹介し、比較読みを行ったり、記事に対する自分の考えをワークシートにまとめグループ活動

で交流したりする時間を授業の帯時間として設定した。制限時間内に読解し、意見交流を行うことで、より集中力が増し、その後の授業にも意欲的に取り組めるようになった。また、社会情勢にも興味を持ち、自分事として考えるきっかけとなった。特に、6社の新聞の比較読みを行うことで、共通点・相違点・特徴などを生徒が自発的に分析する姿が見られるようになった。

さらに、「生物が記録する科学―バイオロギングの可能性」・「モアイは語る―地球の未来」の単元を中心に、ＳＤＧｓ関連の記事を探して、17項目と照らし合わせながら情報収集し、レポートにまとめて交流する活動を実施した。世界的な活動としてのＳＤＧｓを自分事として捉え、「今自分たちにできることは何か」、「学校や委員会活動としてできることは何か」などといった視点に立って、多角的に課題や具体策を考え合うことができた。

（３）社会科における取組：３年生「今日の身近な新聞記事の読解」

①授業開始時に「今日の身近な新聞記事」の時間を設け、その日の第１面や身近な記事を生徒に紹介する取組を実施した。

②６社の新聞記事の比較読みを通し、記者の着眼点の違いを学習し、情報収集力を育てる活動を実践した。

③定期テストで、授業での実践をもとに時事問題などを出題し、リアルタイムの社会情勢についての知識の定着を図った。

３．成果と課題

（１）成果

今年度は教科での取組だけでなく、全校生徒によるＮＩＥの取組を試みて、図書委員会主催の「おすすめ新聞記事コンテスト」を毎月実践することができた。図書委員会の生徒は、毎回６社の新聞記事を読み比べながら、気になる記事や全校生徒に紹介したい記事を探すことを楽しんでおり、校内に掲示した記事を生徒たちも立ち止まって読む光景が見られるようになった。生徒主体での取組であるからこそ、その浸透度合いも増している。来年度も継続し、新聞が生徒たちにとってより身近なものとなるよう取り組んでいきたい。

（２）課題

おすすめの新聞記事は校内の３カ所に掲示しているため、記事の紹介時やコンテスト開催時に、生徒の手元に新聞記事がなく、掲示場所まで確認しに行く必要があった。また、図書委員会で各クラス・学年・全校生徒の投票を集約することにも時間がかかった。そこで、ＧＩＧＡスクール構想の取組と連携させ、ＧＩＧＡ端末を利用してロイロノートやTeams・Formsなどを活用した取組を実施しようと考えている。

中学校　国語科３年生

論証の強さを評価する―NIE の実践を通して―

京都市立大淀中学校　教諭　矢　倉　裕　也

１. 実践の概要

○単元の目的の理由と新学習指導要領との関係

予測不可能な現代にとって、様々な視点で物事を考えることは今後ますます重要になってくる。同じ事象や現象でも「ものの見方・考え方」を活用することで、多様に事象を捉え、幅広く認識し、豊かに関わり、つながることを目的とする。学習指導要領Ｂ　書くことのア「関心ある事柄について批評するなど，自分の考えを書く活動」を受けて設定している。

○新聞活用のポイント

事前のアンケートによると、家で新聞を購読している生徒は全体の５％であった。また、生徒の中で新聞に日頃から目を通している人はたった１人であった。

このように新聞を読みなれていない生徒にとって、同じ内容の記事でも新聞社によって差異があることすら知らないだろう。各新聞社が「事実」についてどのように取り扱っているか、構成や表現の仕方について比較させる。その後、自身でも記事について調べ学習を行い、それら材料をもとに、最終的に自分の考えをコラムとして書き、クラスで意見交流を行い、「強い論証とは何か」を考える。

新聞に関するアンケート

成績には一切関係ありません。無記名で正直にお答えください。

１．家で新聞を購読（こうどく）していますか。※どちらか一つに○

購読している　　購読していない

【　　新聞】

２.新聞をどのくらいの頻度（ひんど）で読んでいるか。※１番当てはまるものに○

毎日　　週に１回　　月に１回　　１ヶ月に１回　　年１回　　全く読まない

３.新聞を読むとすればどこを見るか。※複数回答可

１面　　社会　　スポーツ　　テレビ欄　　広告　　その他【　　】

４.自分に必要な情報をどのように得ているか。※１番当てはまるものに○

インターネットのみ　　インターネットとニュース番組　　インターネット・ニュース番組・新聞

〇新聞６紙の閲覧コーナー設置

本年度は、学校図書館司書の協力を得て、図書室前に NIE コーナーを設けた。毎日６紙(朝日・読売・毎日・日経・京都・産経)を NIE コーナーに常時置き、新聞に目を触れるようにした。また、その日が過ぎた新聞は図書室内の新聞コーナーに移動させ、過去の新聞にも目を触れられるようにした。誰でも気軽に手に取れる場所に設置したことで、新聞を手に取る生徒も増えたようである。

２. 実践の内容

第１時　新聞記事から関心がある記事を選定し、比較する。【図書館教育】

１時間目に新聞社６紙の中から自分が採り上げたい記事を１つ選定する。そして他の新聞記事から同じ記事を探し、比較する。比較するポイントとしては４点。「日付」「見出し「記者の主張」「記事の流れ」である。その比較項目４つの共通点と相違点を見つける。余力のある生徒は３紙比較を行う。この時間のまとめとして、この時点での記事に対する自分の意見を書き込んでおく。

普段新聞に目も留めてなかった生徒が一心不乱に新聞を広げ、記事を読み漁っている様子は印象深かった。自分の好きな新聞記事を取り上げることによって、生徒の主体性を高める仕掛け作りができたと思う。

「物語」を超えた先に－論証の強さを評価する－　ワークシート　其の壱

組　番　名前

【目標】新聞記事を比較することを通して、共通点と相違点を発見する。

【ミッション】二紙以上の同じ内容を扱っている記事を読み比べ、共通点と相違点を表にまとめよう。

新聞社名				気付き ○共通点 ●相違点
日付				
見出し				
記者の主張 ※記事のあらすじ				
記事の流れ 例①事実②データ③主張				
私の主張・意見				

↑第１時のワークシート

第２時　比較した記事をもとに追跡調査を行う。【情報教育】

第１時で取り上げた個々人の記事の信憑性を確かめるため、パソコンルームに移動し、記者になったつもりで追跡調査を行う。その際、最終的に自分が記事を起こすときのことを意識するために、「事実」「理由・根拠」「グラフ・データ」「主張」の順でまとめさせるようなワークシートを作成した。

生徒は新聞記事の情報が各新聞社のサイトにも載っていることを発見したり、新聞記事では知り得なかった別の角度からの情報を入手したりしていた。しかし、その記事のエビデンスがはっきりしないことから、自分の記事の参考にするかどうかなど、生徒の中で葛藤が起きていた点は有効であったと感じた。　↓第２時のワークシート

「物語」を超えた先に－論証の強さを評価する－　ワークシート　其の弐

組　番　名前

【目標】新聞記事の追跡調査を行い、自分の考え(主張)をまとめよう。

【ミッション】新聞記事の内容を追跡調査し、自分が記事に起こすときの「事実」や「データ」を収集し、自分の考え(主張)を考えよう。

項目	説明	事実	理由根拠	グラフデータ	主張
大見出し	一番伝えたいこと	何が起こったか	自分の主張を他の人に納得させるための情報	主張を納得させる客観的な数字やグラフ・図表	自分の意見(1/3以上)
記事原稿					
メモ欄	記事の補足情報				
具体例	ソフトバンク4連へ邁進。	・ソフトバンクが4年連続日本シリーズに出場 ・ポストシーズン13連勝中で短期決戦に強い。	・巨人は2週間以上試合感覚が空いるのは不利から。 ・京セラドーム開催や全試合DH制の導入でソフトバンクに有利だから。	・21世紀以降5回日本シリーズに出場して、全て日本一に輝いている。	〈結論〉以上の理由を踏まえて日本一はソフトバンクで間違いないだろう。

第３時　調査材料をもとに，自分の考えをコラムとして文章化する。【職業体験】

１、２時間目で記事について調査したことをもとに、自分自身でオリジナルのコラムを作成した。

その際、実際に京都新聞者の元記者(現デスク)の方に来て頂き、記事の書き方、構成の作り方を教えて頂いた。

生徒は話を聞きながら積極的にメモをとったり、作成中も意欲的に質問をしたりするなど、普段関われない職業の方とも交流することができ、貴重な時間を過ごすことができた。

←記事の構成について
説明している様子

生徒も積極的に質問をしていた→

第４時　コラムを発表し，意見交流を行う。【公開研究授業】

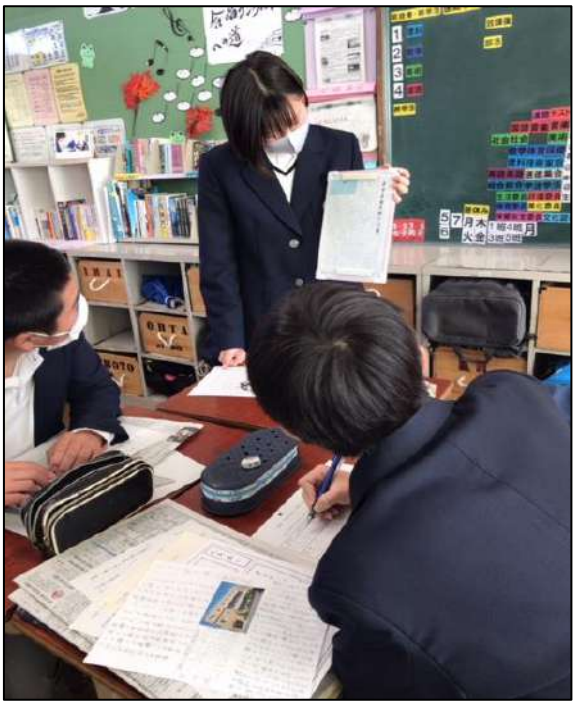
これまで作成してきた自身のコラムをグループ毎に１人２分間で発表していった。その際、１人１分でグループメンバーは評価していくことになるが、その際に、「トゥールミン・モデル」という具体的な評価基準を定めることで、論証の正確性を競わせた。

今回の単元テーマは、「論証の強さを評価する」ことである。

説得力のある記事はどれだったか、それはなぜかを考えさせ、最終的に「『強い論証』とは何か」を問う、という流れであった。自分のコラムには説得力があるかを自他共に問うことに力点を置いた。そして発表が終わったあと、全体に対し「強い論証とは何か」を問い、それぞれの考えを記述させ、本単元は終結した。

＜記事作成中の様子＞

＜発表時の様子＞



３. 成果と課題

新聞を活用した授業に取り組んだことで、新聞を身近なものに感じられたことは一定の効果があったように思われる。

また、新聞という教材を用い「強い論証」を探究することは、高等学校入学以降、または社会人になった際、これまでよりも難しい論説文や文章を読む中で、自分の中に納得解を得られる一つの指標探しのようなものであったと言えるのではないだろうか。

次年度の課題としては、この単元が終わった後も、継続して新聞を読む習慣を身に付けるような取り組みを行っていくことである。今後も継続して身近な教材として、教科横断的に新聞を活用した授業を実践していきたい。

高等学校　高大連携教育プログラム
「学びの深長」のツールとしての新聞～多様性と寛容を求めて～

龍谷大学付属平安高等学校　　教諭　　佐々木　じろう

１．はじめに

本報告は、本校プログレスコース３年生・龍谷大学政策学部入学予定者による実践の報告である。例年、後期考査後、龍谷大学入学予定者に対し、学部学科より高大連携教育プログラムの一つとして入学前課題を課している。政策学部では、課題の一つとして、「講義・オリエンテーション・レポート提出などを行い、その後政策学部の学びの現場や政策学部生の地域における活動を取材して新聞を作成し、報告を行う」(「実施要項」より）がある。この課題を通して生徒の振り返りから「学びの深長」と新聞記事作成との関わりを考察する。また、その考察から、次年度の取り組みの予定を報告する。

２．取材先決定から新聞記事作成及び報告会までのながれ

（１）取材先の決定

取材先の決定は、リモート会議によるオリエンテーションで実施。政策学部側が企業・ゼミ計６団体を紹介。その後、各団体による活動説明。各班（３班、各７名)、生徒による取材先選定作業。各班の決定した取材先については、表１参照。

＜表１＞　「政策学部入学前課題取材先」

	A 班	B 班	C 班
取材対象	K 社	R 社	I ゼミ
主な活動場所	京都市	笠置町	京丹後市
社会問題	SOCIAL BUSINESS・障がい者支援	害獣処理とその後の活用・SOCIAL BUSINESS	町おこし・過疎化・害獣処理・放置竹林

（２）取材の実施

取材依頼は各班で行う。コロナ禍であったことから、取材はすべてリモートで実施。各班のリモート取材には、高校側報告者とサブの担当が同行（参加)。

（３）新聞記事作成

大学側からの条件は、「新聞の形態は自由」「根拠を明確に」の２つ。特に新聞定期購読が低下している昨今、新しいスタイルの新聞の可能性も含め、自由に作成することが要望された。中間報告会を経て、学事情報システム「manaba」に word で提出。

（４）報告会

新聞記事作成後、在校生の政策学部進学希望者に対し、新聞記事の内容について報告。

（５）学部側・高校側の支援

①大学側（教員各班１人ずつ）

課題オリエンテーション（リモート）・中間報告会（リモート）・報告会（本校講堂）の各運営，メールによる個別質問へのアドバイス

②高校側（報告者およびサブ１人が担当）

大学側支援時の同行，現地取材への同行，中間報告前状況確認，新聞の作り方・ネットとの違い・見出しなど資料提供，新聞記事提出前状況確認，報告会リハーサル，振り返り（この課題で何を学んだか）

３．生徒の振り返りからわかったこと

（１）言葉の選択の難しさを理解

①つなぎがうまくできなかったので、接続詞の大切さが分かった（B 班）
②どのような人を対象にして新聞記事を作成するのかを考えることで、字のフォントや大きさを変えなければいけないことを学んだ（B 班）
③今回見出しを〃猫が磨く可能性〃にした。新聞の初めに持ってくる言葉は深く考えられていることに気づけた（A 班）
④いつも読んでいる新聞は記者がどれだけ読者に読んでもらえるかを日々考えないと良い記事は書けない。1 つの記事を書くことがどれだけ難しいかを学べた（A 班）

以上のことから、内容を正しく伝え、人に興味を持ってもらうためには、見出しや文字の形や大きさなどの工夫の大切さを知り、言葉の重要性を認識した。

（２）人の生きざまに共感

①大学生で起業をしている人がいるのだということを学び、とても良い刺激となった。（略）起業というのはもう少し年上の方がしていると思い込んでいたため、同年代の方が努力する姿は『私も頑張らねば』と思うきっかけとなった（B 班）
②ソーシャルビジネスをする方達の偉大さを学んだ。その人達のおかげで解決した社会問題もあるからだ。また、社会的な価値を重視して事業をするということは誰にでもできることではない（B 班）
③誰でも企業するチャンスがある。今まで起業というのは、私には遠いもので特別な人(頭が良い人など)がやるものだと漠然と思った。（略）なんとかしなければいけないという強い気持ちが大事なのだと感じた（B 班）
④会社を立ち上げる際、周りから「障がい者と一緒に働くことは無理」と言われたけれど、動じることなく自分を信じ、会社を立ち上げる代表はすごいと思った（A 班）

取材者は、比較的年齢が近く、親近感が持てる取材対象者が、社会問題に対する強い覚悟を持って起業したことなど、取材対象者の人間性に共感できるとこ

ろを見つけたことで、今後の自分の生き方の一つの選択肢として考えることができた。

（３）社会問題への当事者性の高まり

①害獣への対策の仕方を一度人々で話し合うべきだと考えた。（略）命の大切さを改めて感じることができた。食べられるために死んでいく動物達のことはもちろんのこと、その背景には、心を痛めながらも動物達を（捕獲し）解体する人がいるのだということを知った（B 班）

②「獣害は人間の自業自得ということ。（略）鹿が樹皮を食べて木を枯らせているのも、元々食べていた笹が減ったことによるものだ。 報告会で『人間のせいなのに動物の方を殺すのはおかしいのでは無いか』と言った人がいたことに驚いた。（略）殺されてそのまま放置されていた命を R 社さんは「美味しく頂く」という形で弔われている。このように殺すなら最後まで責任を取る（食べたり遺体を処理したりする）ことが、今の私達にできる事かと考えました（B 班）

以上のことから、「害獣駆除」「SOCIAL BUSINESS」「命をいただく」などについての認識を深めただけでなく、取材を通して自分が今後その課題にどのようにアプローチするのかを当事者として考えはじめた。

４．新聞記事作成において、「学びの深長」はあったのか

（１）社会と自己をつなぐ側面としての「学びの深長」

先の振り返りの内容から、「新聞記事作成」という課題から、表現力という技術的な未熟さを実感しただけでなく、野生の鹿が害獣になってしまった原因など、現象の裏の側面を見る視点に触れられた。また、身近な人の生き方に自己の生き方や命そのものを考え、社会と自己とがより深く結びつけられるようになったことがここでわかった。

「学びの深長」を自己と社会（問題）をつなぐことという側面でみるならば、自己のアイデンティティの深化を伴いながら、学びが深長されはじめていると言えるのではないだろうか。

（２）「学びの深長」が見えた背景

①取材対象の活動に価値観がゆさぶられたこと

A 班では、取材を通して、障がい者の自立が、勤労とその対価によってあらわされるという考えから、仕事を通して成長したことで表されるという見方を知った。移動手段の多様化と人との接し方の向上や広がりによる余暇の過ごし方の変化を含む「心の豊かさ」としてあらわされるということを知った。

B 班では、取材対象者が鹿の捕獲から解体・加工作業までをこなす中で、動物の命を奪うことに対する心の葛藤やこの仕事に反対する家族にも向き合いながら仕事を続ける姿勢に共感、同調していった。

②百聞は一見にしかず

A 班では、障がいを持つ靴磨き職人や研修生のための練習用靴の寄付を全校に呼びかけ、その企業に寄付をした。リモート取材の翌日、京都大丸の期間限定特別店舗へ数人の生徒が行き、スタッフの話から、職人の靴磨き練習用の革靴の不足を知ったことがきっかけだった（＜写真１＞：革靴回収ボックス）。

＜写真１＞

B 班では、この記事作成の過程で、リモート取材だけではわからない、地域の環境や実際の鹿の捕獲の様子などの情報を得るため、高校に対し現地取材（笠置町）の許可を求めてきた。高校側はこの交渉で、人数制限や一定期間の検温の提出などを条件に許可をだした。この取材では、実際に罠の確認に同行し、捕獲場面（＜写真２＞）を目の当たりにしたことが害獣駆除の残酷性の部分が可視化され、「学びの深長」につながった。

＜写真２＞

このように、現地取材したからこそ出会える何かがあることを教えてくれた。

③教師の役割は、「何に出会わせるか」である

取材対象（個人や団体）の活動が社会問題と深くつながり、その問題と真剣に向き合う姿勢を見ることで、これらの問題の深さや改善の難しさを感じ取る材料となっていたと推察する。また、取材者にとって取材対象は、少し年齢の離れた身近な人物で特別な存在ではなく親近感を持ち、自分もそうなれると考えることにつながった。これらのことが、取材者の考えや価値観をゆさぶり、自己の変容につながり、当事者性を増していった背景だと考えられる。

実は、これが学部側の最大の支援だったのではないだろうか。取材対象者を意図的に人選し、取材によって何が見えるのか、その活動に正解がないことをも把握していた上でのことが、生徒たちの主体的な学びのきっかけとなった。

これらのことから、われわれ教師は、生徒に出会わせるテキストや人、モノが持つ意味をより理解し選定しなくてはならない。このことが、自己の変容を伴う「学びの深長」のために必要な要因の一つであるからだ。

５．次年度へ向けて

今回の政策学部入学前課題「新聞記事作成」から、本校生徒が、「読み・書き」を含む「表現力」が弱く、新聞形態の「自由」を思った以上に消化出来なかったことがわかった。政策学部入学予定者の新聞の定期購読率は、約10.％だった。このように新聞記事そのものになじみが薄い事実から、「表現力」については、新聞記事の抜粋で、「意見」と「事実」の理解を目指すため、判断の根拠をていねいに確認していく。次に、「自由」ついては、「当たり前を疑え」ということを合い言葉に新聞記事とそれに関する客観的データや関連文を読むことで多面的・

複眼的な視点を養う。また、新聞に対し自由で新しい形態の提案ができるように、既成の新聞そのものに多く触れる機会を作ることを考えている。

次年度の実践は、高大連携教育プログラム「現代を学ぶ」(高3プログレスコース文系7クラス、4単位）において実施予定だ（＜表3＞参照)。通念を通して「多様性と寛容と SDGs」をテーマとする。新年度の新たな取り組みとして、「選択別テーマ学習」(約22時間）の中に新聞作成と発表の機会を設ける（＜表2＞の⑤～⑦，＜表３＞③太字箇所)。

＜表3＞は、授業内容とつけたい力と関連させたい事項（SDGs）が授業内容に含まれていれば○で表示してある。

＜表2＞「選択別テーマ学習」のながれ

①担当者（2021年度7名）それぞれが興味関心を持つ社会問題を1つ取り上げる。
新年度の大きなテーマは「多様性と寛容と SDGs」である。
②テーマ発表
③生徒が1テーマを選択し登録
④テーマについて学ぶ
⑤学んだ内容から新聞記事作成
⑥新聞記事の内容をクラス発表
⑦クラス代表のコース全体発表

＜表3＞　「『現代を学ぶ』授業内容とつけたい力関連表」

	読み	表現力		多様性／寛容	SDGs
		書き	発表		
①新聞記事	○	―	○	○	○
②憲法学習　　ポスター作成・発表（クラス・代表者コース全体）	○	○	○	○	○
③選択別テーマ学習　学習・**新聞記事作成・発表（テーマ別クラス→代表者コース全体）**	○	○	○	○	○
④最終レポート　4000字（全員）自ら設定した課題に関するレポート	○	○	―	○	○
⑤平和学習　公募による実行委員会主催「次へとつなぐプロジェクト2021」	―	○	○	○	○

６．おわりに

政策学部入学前課題の新聞記事作成によって、生徒の成長が見えるよい機会となった。また、「生徒に何を出会わせるか」という教師の役割の重要性も確認できた。それらのことをふまえることで、当事者性を生む主体的な学びへと変えていく可能性を NIE 教育が持っていることに気付くなど多くの学びを得て、NIE 実践校としての初年を終えた。2年目の次年度は、予定している新しい実践について良い報告ができるよう努力していきたい。

高等学校　国語科・地理歴史科・公民科・家庭科・総合的な探究の時間

新聞を活用して文章力・多面的考察力・生きる力・地域探究力を高める授業実践

京都府立須知高等学校　実践代表者　教諭　辻垣　晃一

１．実践の概要

本校は、京都府教育委員会より地域創生推進校の指定を受け、昨年度から１年生の総合的な探究の時間において、「京丹波学」というテーマで学習をしている。今年度は、昨年度に引き続き１年生の「京丹波学」での新聞活用について触れると共に、一般教科における実践事例も掲載した。国語科では新聞作りを通して客観的な文章とは何かを学び文章表現力を身につける実践、地歴科では授業の導入での使用や教科通信の中で取り入れるなど補助教材として扱い多面的な考察力の向上を目指した実践、家庭科では生活や社会とのつながりを感じさせて生きる力を養う実践、総合的な探究の時間では町づくりのヒントを探すなどの地域探究活動を通じて新聞への愛着を深める実践を行った。

２．新聞の置き場所と活用の仕方

昨年度と同様、学校図書館司書の協力を得て、図書室にＮＩＥコーナーを設けた。今年度は、新聞を重点的に使用する各教科担当者と年度当初に話し合い、切り抜きが必要な教科があれば早めに他の担当教員に知らせて、使用が重ならないようであれば、１ヶ月まるごと生徒に配布して切り抜きをするなど、昨年度よりも各教科でタイムリーに使えるように工夫した。

３．実践の内容

（１）国語科（担当：教諭　森川　萌）

普通科３年生の選択科目「国語表現」の授業の、一年間の授業での学びの集大成として、クラスの「新聞」を作る活動を行った。新聞記事の文体や構成の模倣を通して、自分の思っていることや感じたことを論理的かつ効果的に伝えることを目的とした。

新聞作成の第一段階として、一人一冊ずつの新聞を配布し新聞記事の特徴などに着目しながら、自分が書こうと思っている内容に近い記事を二つ選ばせた。切り抜いた記事を手元に置いて参考にし、自分の記事を作成させるためである。

以前にも新聞づくりの課題に取り組んだことがあるが、新聞を書いてみようというだけでは、論理構成や語彙、言葉の選び方の点で新聞記事らしい文章、論理的な文章というのは作りにくい。文体模倣という形で新聞記事を参考にさせることによって、事実と考察の分け方や客観的な文章への理解が早かったように思う。また、新聞の切り抜き作業をさせる中では、一冊の新聞の中にも様々な

種類の記事があり、それぞれに言葉遣いや雰囲気が大きく違うことに驚く生徒もおり、普段ネットなどで取捨選択して読んでいる記事とは違う紙の新聞から得られる、情報量の多さと分野の幅の広さに改めて触れることができた。

（２）地理歴史・公民科（担当：教諭　辻垣　晃一）

地理歴史・公民科の授業では、毎時間直近の新聞報道やニュースを話題にして、興味関心を高め、時事的な課題と学習する内容との接点に着目し、内容の本題に入る導入としている。

今年度、とくに地理Ａと日本史Ｂで新聞を活用した授業を行った。地理Ａでは、「自分の知らない国について情報を集めまとめることができるようになろう！」という目標のもと、教科書と地図帳から抜き出せる該当の国の情報（たとえば、自然環境・生活や文化の特徴・各種産業の特徴・その他気がついたこと）を整理する専用の自作シート（Ａ４サイズ１枚）を使い、その裏面に取り上げた国に関する直近の新聞記事を貼り付けて、必要な部分だけ傍線を引き、生徒に読ませた。ワークシートにある「その他気がついたこと」という空欄に、裏面の新聞（たとえば、ミャンマーについてまとめるときはスーチー氏軟禁の記事）を通して読み取れる情報を記入するように促した。今年度は、生徒達自身が新聞を選んで貼り付ける作業をすることができなかったため、次年度以降の課題としたい。また、朝日学生新聞社発行「小松義夫の世界のおうち探検」コーナーの大きなサイズの写真が、各地域の生活状況を生徒達に示す際に有効であった。

日本史Ｂでは、『千字歴史通信』というタイトル（１号につき字数は千字前後で完結、Ａ４サイズ１枚程度）の歴史だよりを月に１回程度のペースで発行しているが、情報源として、新聞やその他メディア、文献等から得られる歴史に関するホットな話題を使いながら考察した内容を提供している。新聞を通して得られた情報を軸に、自身の考察も加えた上で、歴史的事象や人物に関する評価など、多面的な見方ができるように心がけている（※１）。また、京都新聞に掲載される京都府下の歴史情報に関しては、日本史が現代とかけ離れがちな部分を解消させる役割を果たしてくれているし（※２）、地域の歴史を学ぶことで郷土愛の育成や自然と人間との共生に関わる考察にもつながる（※３）。

※１　たとえば、朝日新聞「千田先生のお城探訪松永久秀編」で久秀悪人説を見直す等。

※２　たとえば、大河ドラマ放映に合わせて明智光秀が実際は本能寺の変の際、本能寺に

はいなかった可能性がある史料が紹介された記事など。
※３　たとえば、京丹波町西岸寺の文化財を守るために境内の木を伐採したこと等。

（３）家庭科（担当：教諭　田口　優子）

２年生家庭基礎のまとめとなる時間に、新聞を活用した授業を行った。家庭基礎では、「衣食住、保育、高齢、共生、生涯発達、家族家庭、消費経済」など、生活や社会に関わることを幅広く学習する。学習したこと（授業）と社会を結びつける手段として新聞を活用した。

生徒は、新聞の中から興味のある記事を選び、それが家庭科のどの分野に関わりが深いかを考えた。記事は複数の分野にまたがっていたり、直接学習したことではなくても広い意味では何かの分野に繋がっていることを感じたようであった。記事を選んだら、要約、感想を記入し、ワークシートと記事を他者と交換して相互チェックを行った。他者の記事を読んだり、新聞に全体的に目を通すことで、社会には様々な出来事、人物が存在していることを改めて知ることができた。授業は生活や社会に繋がっていて、よりよい生活や社会にするために学習するという関連性を感じられる取組のひとつとして、今後も新聞の活用を推進していきたい所存である。

（４）総合的な探究の時間（担当：教諭　山内　沙樹、教諭　近藤　秀樹）

第１学年の「総合的な探究の時間」において、新聞を活用した２つの取り組みを実施した。また、生徒の実態・考え方・新聞に対する意識等を把握するため、取組の事前・事後にはアンケート等を実施した。

【取組１：“新聞”を知る】

①新聞には、社会の出来事や様々な情報が分野・ジャンルごとに掲載されていることを知る。
②複数の新聞社の新聞記事に目を通す。

【取組２：新聞記事から“まちづくり”のヒントを得る】

①京丹波町について書かれている新聞記事を探す。
②新聞記事からまちづくりのヒントを得る。
③ペアをつくり、意見を交換し合う。
④意見交換した内容を基に、記事について自己の考えをまとめる。
⑤発表する。
⑥“第11回いっしょに読もう！新聞コンクール(日本新聞協会)”に応募する。

↓

京都市内地域と“森の京都”地域を結ぶ観光プランを考える取組へ

【生徒の感想】

・ニュースでは報道されなかった話題や情報にも目を向けることができた。新聞を通して自分の中にある情報量を増やしていきたい。
・１つの記事からこんなにも自分の考えが広がることに驚いた。
・新聞から１つの記事を選んで自分の意見を深く掘り下げることができた。
・１つの記事からたくさんの考え方につなげられ、より考えが深まった。人によって考え方が違う所もあり、共有することが大事だと思った。
・新聞の便利さに気づくことができた。最近ではインターネットが主流だが、新聞にも良いところがあった。
・新聞記事はジャンルごとに分けて掲載されていて、見やすくつくられていると思った。
・新聞は意外とおもしろいものだと分かった。
・新聞は何度も見返せるのが良いと思った。
・普段読まない新聞を読んでみて、思っていた以上にたくさんの情報が載っていて驚いた。
・この取り組みを通して新聞に対する見方が変わった。
・普段あまり新聞を読まないが、地域のことが書いてある記事から、まちづくりについて考えることができた。今後の授業でもっとまちづくりに目を向けていきたい。

【活動のまとめ】

取組前に実施した事前のアンケートから、ほとんどの生徒がＳＮＳ上の情報を“ニュース”として捉えている傾向にあることが分かった。新聞を手にしたことがない生徒も多くいた。当取組をとおして、新聞そのものに興味を示した生徒が多く、事後のアンケートにおいて、「新聞の良さに改めて気づくことができた。」という感想が多数寄せられた。

また、当取組をとおして、自己の考えの広がりを実感した生徒も多く、１つの新聞記事から自己の考えを記し、他者と意見交換し、自己の考えを再考するという取組をとおして、「総合的な探究の時間」の主なねらいの１つとしている“より良い生き方・在り方”を思案する良いきっかけとなった。

次年度２年生での総合的な探究の時間では、新聞以外の情報（本やデータベース、地域の方へのインタビューなど）も集めて地域探究活動を行い、自分たちが考える地域のあり方などを考察し、各自で新聞作りをして発表する機会もつくっていきたい。

『【取組１】“新聞”を知る』の様子

４．取組を終えて

今年度は、昨年度に引き続き、進路学習と地域学習を行うと共に、教科の中でも新聞を使った学習を行った。新聞からどのようにして情報を引き寄せるか、その事実を元にどのように考察すれば良いのか、スマホだけのソースに頼りがちな現在の生徒達にとって、新聞を素材にメディアリテラシーや文章力等々の育成につながるような授業実践ができたと考える。

次年度以降は、これまでの２年間の実践を生かすことができるように、各教科の中で新聞を素材とすることを意識すること、合わせて、もっと教科の中でも生徒達自身が新聞を通して考察できるような工夫をすることが求められると考える。

中学校・総合的な学習の時間

継続して培う「オピニオン」のちから

綾部市立上林中学校　船越寿子

１　はじめに

本校は、京都府北部の山間にある準へき地校である。全校生徒は 14 名。自然豊かでのんびりとした地域の環境の中、素直で優しい子どもたちが、世間で起きていることに対して、それほど関心をもたずに日々を過ごしている。

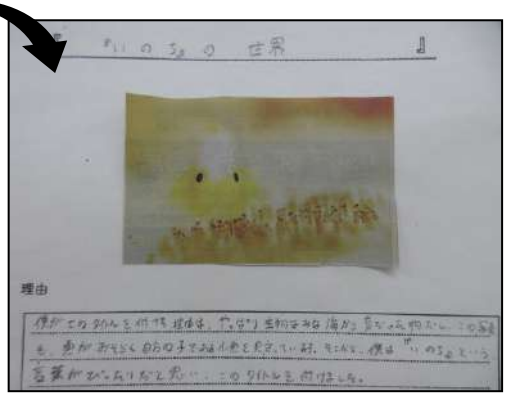
オリンピックが開催されていても、「え、知りませんでした」と答えてしまう子どもの現状に驚き、ＮＩＥの実践をスタートさせることになった。あれから５年。ようやく新聞が子どもたちにとって身近なものになり、社会情勢や世間で起きていることにも関心を抱くようになってきた。何より、そうした社会の動きに対して、自分の意見を持つことができるようになったことが実践を継続して得られた大きな力だ。

今年度は、思い描いていた計画通りには進められなかったが、５年間継続してきたからこそできた実践内容について報告する。

２　実践内容

⑴　オピニオンタイム・オピニオン交流会

実践当初から週１回～週２回、15 分間「オピニオンタイム」として、新聞記事を読んで考えたことを書いたり、１分で記事の内容を紹介したりする活動を継続してきた。今年度は、感染拡大防止の観点から、記事に載っている写真にふさわしいタイトルを付けたり、記事の内容を読んで見出しを考えたりするところからスタートした。その後、新しい生活様式の観点に沿って、これまでから行ってきた異学年混在の３グループに分かれて、自分が仲間に紹介したいと思った記事を１分でプレゼンする活動へと移行することができた。



「ふさわしいタイトルをつけよう」掲示の様子

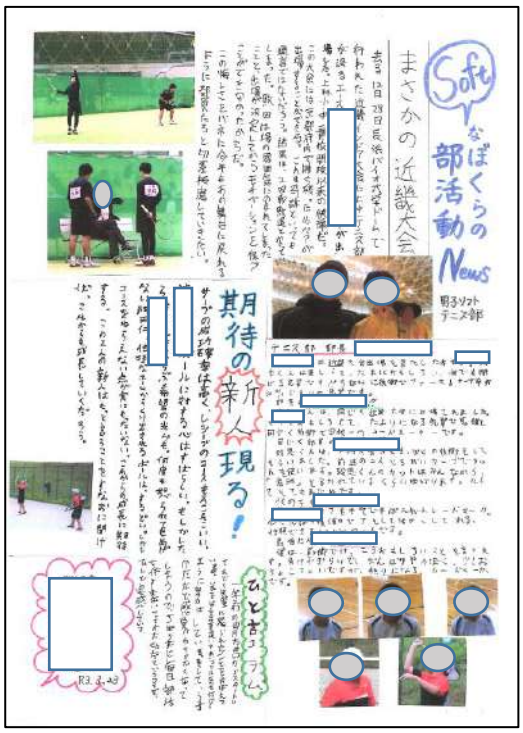
学期に１度行う「オピニオン交流会」では、１学期は「オピニオンタイム」で紹介した記事の中から厳選した記事をグループで再度紹介し合い、「まわしよみ新聞」を作成した。ＮＩＥ実践者報告懇談会や全国大会などの参加を通して知った「まわしよみ新聞」は、生徒自身が自分の選んだ記事を振り返る時間であり、再度プレゼンすることによって新たな気付きがあり、仲間の意見を聞くことでさらに考えが深まる様子が見られた。作成した新聞は、別日に全体で発表し、１学期の振り返りを行った。

「まわしよみ新聞」とは……

興味のある新聞記事を切り抜き、意見交流しながら壁新聞を作るワークショップの一つ。

２学期は、「今年の漢字」に関する新聞記事を取り上げ、歴代の「今年の漢字」に着目して何があったのか出来事を予想したり、１年間の自分自身を振り返ったりして、楽しみながら意見を交流した。

３学期は、新入生に向けて部活動を紹介する「部活動新聞」を作成した。編集長となった生徒を中心に、記事の内容や分担、レイアウト、写真の選定、校正などを部員同士で協力して活動することができた。



⑵　総合的な学習の時間

今年度より「ＳＤＧｓ」についてまずは知り、知識を深める中で、17 の目標や世界の現状、あるいは地域の現状から、興味をもった内容について自分たちで課題を設定し、解決に向けてどのような方法で調べ学習を進めていくか考えながら総合的な学習の時間を進めてきた。2020 年でＳＤＧｓ 17 の目標達成年数まであと 10 年となったこともあり、新聞記事にも関連のニュースが多く取り上げられるようになった。

本校では、７年生が毎年地域の川の「水生生物調査」を行っていることもあり、「安全な水とトイレを世界中に」「海の豊かさを守ろう」「陸の豊かさも守ろう」など、関連する主要な目標について新聞記事を探したり、地域の川とＳＤＧｓとのつながりに気付いたりしながら学習を進めた。

7年生　壁新聞を使った発表

８年生では、学級で興味をもった目標について個別で調べ学習をし、全体交流する中で「働きがいも経済成長も」に焦点をあてて学習を進めてきた。

事前学習としてＳＤＧｓについて知るために効果的だったのは、中高生新聞だ。社会の現状を知る手段としてだけでなく、どんな人がどのような目的でどう活動しているのかが明確に記述されているので、生徒自身が課題を見つけやすく、何を学んでいくべきか計画を立てやすかった。

8年生 総合的な学習の時間 まとめの発表会

社会の現状と日本の現状、そして、自分たちの暮らす地域について目を向け、地域に暮らす人々を取材することで、「働きがい」「働くとはどういうことか」という本質的な答えまで導き出すことができ、新たな問いを発見するところまで学習を深めることができた。

⑶ 各教科への広がり

本校は６年前に施設一体型の小・中一貫校として開校した。小学校、中学校のそれぞれの発達段階、節目を大切にしながらお互いの校種について理解を深め、今日まで歩みよりながら進んできた。実践から５年経った今でも大切にしていることがある。それがＮＩＥアドバイザーである文教大学　橋本祥夫先生から指導助言していただいた下記のことである。アドバイスをもとに、校内研修をはじめ、こども新聞の購読や新聞の配置の工夫など、地道に取り組んできたことで効果が見えてきた。

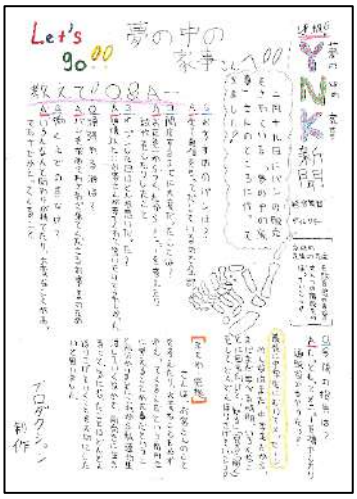
中学校のオピニオンタイムから始まった新聞を教育に生かす取組は、中学校だけでなく、小学校の各教科でも広がっている。

- ＮＩＥは１、２年で成果は表れないので、長期にわたってとにかく継続することが大切。
- 小・中一貫校なので、できれば全校で取り組ませたい。
- 世代間など、異年齢の人と話すほど議論が深まる特性があるので、オピニオン交流会を参観日などで公開する方法もある。
- 新聞を読むことで、社会に目を向けさせ、答えのない問いを考えさせることが大切。

また、中学校３年生の国語科において取り組んだ新聞社へ投稿を書く活動でも、成果を上げることができた。中学校生活３年間の集大成として、自分が興味をもっ

た新聞記事について、意見を持ち、次に教科書に載っている論説文の筆者のものの見方・考え方で新聞記事を再度読み直し、意見を練り合って新聞社に投稿する文章を書かせた。生徒２名が京都新聞に掲載され、口頭で自分の意見を発信する力だけでなく、自分の考えをわかりやすく、根拠を明確にして書く力も育ってきていることを実感した。

5年生　社会科



7年生　職場訪問新聞

３　おわりに

仲間に紹介する記事を探していたある生徒の言葉が忘れられない。「なんか暗い気持ちにしかなれへんな。」

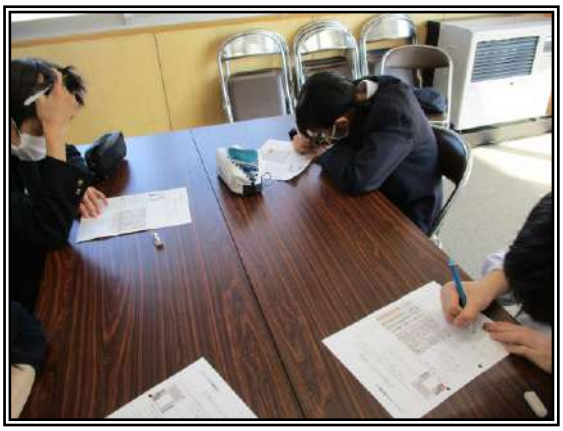
本校でＮＩＥの実践を始めてから５年。新型コロナウイルスの感染拡大により、世界中がほの暗いトンネルの中をさまようような、先の見えない不安感を抱きながら歩き続けている。子どもたちもまた、臨時休校や行事の中止、縮小といった学校生活だけでなく、世間に目を向けても明るい話題のない日々に、辟易しているようだった。それでも、みんなに紹介する記事は、元気が出るような内容にしようと、トップ記事に目を奪われがちだった子どもたちが、新聞の隅々まで目を通すようになったことは、嬉しい姿だった。

また、本校は小規模校であったことがプラスに働き、日常活動である「オピニオンタイム」はコロナ禍においても、ほぼ通常通り行うことができた。昨年度、授業参観で行っていた保護者参加型の「オピニオン交流会」は中止せざるをえなかったが、綾部市におけるＧＩＧＡスクール推進構想のスタートにあたり、地域の方にオンラインで参加してもらうなど、新しいスタイルでの交流会を今後探っていきたいと考えている。

今年度、ＮＩＥの実践を継続して生徒が培ってきた「自分の意見を形成する力」「自分の意見を相手にわかりやすく伝える力」「新聞を作成する力」が施設一体型の小・中一貫校という特性を生かし、下級生へと引き継がれていることを様々な場面で感じることができた。また、教員の中でもＮＩＥの取組が浸透し、普段の会話の中でも自然と実践内容について話題が出たり、授業での取り扱い方など相談したりすることも日

常茶飯である。

「実践校だから新聞を扱う」のではなく、新聞が教材の一つとして教育現場に定着し、どの教員も効果的に扱っていける学校を目ざしたい。



年度	校数	＜これまでの実践校・準実践校・奨励枠・トライアル校＞
1994	2	聖母学院小学校、京都府立商業高等学校（現すばる高等学校）
1995	3	聖母学院小学校、京都市立修学院中学校、同志社高等学校
1996	3	京都市立百々小学校、京都市立修学院中学校、立命館宇治高等学校
1997	3	京都市立百々小学校、京都市立修学院中学校、立命館宇治高等学校
1998	2	京都市立百々小学校、京都市立修学院中学校
1999	3	京都市立養正小学校、京都市立吉祥院小学校、京都文教女子高等学校
2000	3	京都市立養正小学校、京都市立吉祥院小学校、京都文教女子高等学校
2001	6	京都市立山王小学校、京都市立清水小学校、大山崎町立第二大山崎小学校 京都市立花山中学校、八木町立八木中学校、京都文教女子中学校
2002	9	京都市立山王小学校、京都市立清水小学校、大山崎町立第二大山崎小学校 京都市立衣笠中学校、京都市立伏見中学校、八木町立八木中学校 京都文教女子中学校、京都府立北稜高等学校、花園中学高等学校
2003	10	京都市立第三錦林小学校、京都市立山階小学校、亀岡市立曽我部小学校 八幡市立美濃山小学校、京都市立衣笠中学校、京都市立伏見中学校 向日市立勝山中学校、京都府立北稜高等学校、花園中学高等学校 華頂女子中学高等学校
	4	（準）京都市立山王小学校、京都市立清水小学校、大山崎町立第二大山崎小学校 八木町立八木中学校
2004	10	京都市立第三錦林小学校、京都市立山階小学校、聖母学院小学校 亀岡市立曽我部小学校、八幡市立美濃山小学校、京都市立洛北中学校 京都市立洛南中学校、向日市立勝山中学校、長岡京市立長岡第三中学校 華頂女子中学高等学校
	6	（準）京都市立山王小学校、京都市立清水小学校、京都市立伏見中学校 八木町立八木中学校、花園中学高等学校、京都府立北稜高等学校
2005	9	京都市立紫竹小学校、京都市立嵯峨野小学校、聖母学院小学校 京都市立洛南中学校、京都市立洛北中学校、京都市立蜂ヶ岡中学校 長岡京市立長岡第三中学校、京都教育大学附属桃山中学校 京都市立塔南高等学校
	8	（準）京都市立第三錦林小学校、京都市立山階小学校、八幡市立美濃山小学校 京都市立伏見中学校 、向日市立勝山中学校、京都府立北稜高等学校 花園中学高等学校、華頂女子中学高等学校
2006	10	京都市立紫竹小学校、京都市立嵯峨野小学校、京都市立鏡山小学校 城陽市立寺田西小学校、京都市立蜂ヶ岡中学校、京都市立旭丘中学校 京都教育大学附属桃山中学校、亀岡市立育親中学校 京都市立塔南高等学校、京都市立洛陽工業高等学校
	7	（準）京都市立第三錦林小学校、京都市立山階小学校、八幡市立美濃山小学校 京都市立洛北中学校 、京都市立洛南中学校、長岡京市立長岡第三中学校 華頂女子中学高等学校
2007	11	京都市立鏡山小学校、京都市立静原小学校、京都市立松尾小学校 城陽市立寺田西小学校、向日市立第５向陽小学校、京都市立旭丘中学校 京都市立久世中学校、京都市立西京高等学校附属中学校、同志社中学校 京都府立園部高等学校、京都学園高等学校
	7	（準）京都市立紫竹小学校、京都市立嵯峨野小学校、 京都市立洛北中学校 京都市立蜂ヶ岡中学校、京都教育大学附属桃山中学校 京都市立洛南中学校、長岡京市立長岡第三中学校

年度	校数	＜これまでの実践校・準実践校・奨励枠・トライアル校＞
2008	10	京都市立静原小学校、京都市立松尾小学校、京都市立吉祥院小学校 向日市立第５向陽小学校、京都市立久世中学校 京都市立西京高等学校附属中学校、京都市立下鴨中学校、城陽市立西城陽中学校 京都府立園部高等学校、京都学園高等学校
	2	（奨励枠）立命館小学校、京都市立周山中学校
	5	（準）京都市立紫竹小学校、京都市立鏡山小学校、京都市立蜂ヶ岡中学校 京都市立旭丘中学校、京都教育大学附属桃山中学校
2009	10	京都市立吉祥院小学校、京都市立安井小学校、京都市立一橋小学校 京都市立二条中学校、京都市立下鴨中学校、京都市立桂中学校 城陽市立西城陽中学校、綾部市立上林中学校、宮津市立養老中学校 京都府立鴨沂高等学校
	6	（準）京都市立静原小学校、京都市立松尾小学校、向日市立第５向陽小学校 京都市立西京高等学校附属中学校、京都府立園部高等学校 京都学園高等学校
2010	10	京都市立月輪小学校、京都市立安井小学校、京都市立一橋小学校 福知山市立大正小学校、京都市立北野中学校、京都市立二条中学校 京都市立桂中学校、宮津市立養老中学校 京都府立鴨沂高等学校、東山中学高等学校
	7	（準）京都市立吉祥院小学校、京都市立松尾小学校、京都市立静原小学校 向日市立第５向陽小学校、京都市立下鴨中学校 京都市立西京高等学校附属中学校、京都学園高等学校
2011	10	京都市立月輪小学校、京都市立竹の里小学校、京都市立葵小学校 福知山市立大正小学校、京都市立北野中学校、京都市立向島中学校 八幡市立男山第三中学校、京都教育大学附属京都小中学校、東山中学高等学校 京都府立東稜高等学校
	5	（準）京都市立吉祥院小学校、京都市立一橋小学校、京都市立下鴨中学校 宮津市立養老中学校、京都府立鴨沂高等学校
2012	10	京都市立藤ノ森小学校、京都市立竹の里小学校、京都市立葵小学校 京都市立西陵中学校、木津川市立木津南中学校、京都市立向島中学校 八幡市立男山第三中学校、京都教育大学附属京都小中学校、 京都光華中学・高等学校、京都府立東稜高等学校
	5	（準）京都市立月輪小学校、京都市立一橋小学校、宮津市立養老中学校 東山中学高等学校、京都府立鴨沂高等学校
2013	10	京都市立藤ノ森小学校、京都市立朱雀第六小学校、京都市立藤城小学校 木津川市立恭仁小学校、京都市立西陵中学校、木津川市立木津南中学校 京都市立西京極中学校、長岡京市立長岡中学校、京都府立向陽高等学校 京都光華中学・高等学校
	2	（準）京都市立竹の里小学校、八幡市立男山第三中学校
	1	（トライアル校）宇治市立笠取第二小学校
2014	10	京都市立朱雀第六小学校、京都市立藤城小学校、京都市立明徳小学校 木津川市立恭仁小学校、京都市立双ヶ丘中学校、京都市立西京極中学校 長岡京市立長岡中学校、八幡市立男山東中学校、平安女学院中学校高等学校 京都府立向陽高等学校
	5	（準）京都市立竹の里小学校、八幡市立男山第三中学校、京都市立藤ノ森小学校 木津川市立木津南中学校、京都光華中学・高等学校

年度	校数	＜これまでの実践校・準実践校・奨励枠・トライアル校＞
2015	10	京都市立明徳小学校、京都市立高倉小学校、京都市立衣笠小学校 京都市立双ヶ丘中学校、京都市立伏見中学校、八幡市立男山東中学校 京田辺市立田辺中学校、木津川市立山城中学校、京都府立東舞鶴高等学校 平安女学院中学校高等学校
	3	（準）京都市立西京極中学校、長岡京市立長岡中学校、京都光華中学・高等学校
2016	10	京都市立高倉小学校、京都市立衣笠小学校、京都市立宇多野小学校 京丹波町立瑞穂小学校、京都市立伏見中学校、京都市立大枝中学校 京田辺市立田辺中学校、木津川市立山城中学校、京都女子中学校高等学校 京都府立東舞鶴高等学校
	2	（準）八幡市立男山東中学校、平安女学院中学校高等学校
2017	11	京都市立宇多野小学校、京都市立山階南小学校、京田辺市立松井ケ丘小学校 京丹波町立瑞穂小学校、京都市立京都御池中学校、京都市立大枝中学校 木津川市立木津第二中学校、亀岡市立亀岡中学校、綾部市立上林中学校 京都女子中学校高等学校、京都府立久御山高等学校
	3	（準）京都市立高倉小学校、京田辺市立田辺中学校、木津川市立山城中学校
2018	11	京都市立竹の里小学校、京都市立山階南小学校、京田辺市立松井ケ丘小学校 京都市立京都御池中学校、京都市立深草中学校、木津川市立木津第二中学校 亀岡市立亀岡中学校、綾部市立上林中学校、南丹市立八木中学校 ノートルダム女学院中学高等学校、京都府立久御山高等学校
	0	
2019	9	京都市立新町小学校、京都市立竹の里小学校、宇治市立大久保小学校 伊根町立本庄小学校、京都市立下鴨中学校、京都市立深草中学校 南丹市立八木中学校、ノートルダム女学院中学高等学校 京都府立須知高等学校
	2	（準）京都市立京都御池中学校、綾部市立上林中学校
2020	8	京都市立新町小学校、京都市立竹の里小学校、宇治市立大久保小学校 伊根町立本庄小学校、京都市立下鴨中学校、京都市立大淀中学校 龍谷大学付属平安高等学校、京都府立須知高等学校
	1	（準）綾部市立上林中学校

2020(令和2)年度 京都府NIE実践報告書

2021年７月発行
編　集　京都府ＮＩＥ推進協議会事務局
〒604-8577　京都市中京区烏丸通夷川上ル
京都新聞社内
ＴＥＬ：０７５－２４１－５２３１
ＦＡＸ：０７５－２４１－５９４６
Email　　nie@mb.kyoto-np.co.jp